

ねらい

安心して、友達や教師とつながり、伝え合う姿から、架け橋期の子どもの姿を捉え幼保小のつながりを考える。

ポイント

保育を見て、幼保小で考えた架け橋プログラムの研究主題「ドキドキ・ワクワクが生まれる教育をめざして!! ～安心、つながり、伝えあう わ をつくる～」の視点で子どもの姿を語り合う。

実践内容

＜準備＞ 保育指導案には、子ども一人一人の前日の姿と本時の援助を分かりやすく記載しておく。

幼保小が話し合いやすいように「ドキドキ・ワクワクシート」を作成し、視点となる安心・つながり・伝え合う子どもたちの姿と、それを支える教師の援助や環境構成について、保育を見ながら記入できるようにした。また、拡大したドキドキ・ワクワクシートを各グループに用意し、各自が書き込んだ付箋を貼りながら協議を進めた。

＜公開保育＞ 5歳児が、遊戯室で継続して遊んでいる帽子取りをした。2チームに分かれ、試合や作戦会議をしたり、保育室で振り返りをしたりしている姿を見る。



早く走るには
裸足が
いいねん!



ねらって、ねらって!



「転んだ時は、
帽子取らない!」という
ルールにしたらどう?

＜事後研修＞ 2グループに分かれて研究協議を行った。「安心して遊ぶ姿」「人とつながりをもちながら遊ぶ姿」「人と伝え合いながら遊ぶ姿」「3つの視点の子どもたちの姿における教師の援助や環境構成」について、色別の付箋に記入し、グループで共有した。子どもたちが安心して自分の思いを発信できるような温かい雰囲気土台となっていることや、教師のタイミングの良い援助のもと、子どもたちが主体性をもって遊びを進めているということなどが共有された。

また、幼児期に悔しい思いや葛藤する気持ちなども十分に味わい、気持ちの調整力をつけることの重要性や、小学校の教員が幼稚園の保育や幼児期の子どもたちの姿についてより理解を深めることの必要性について話し合った。

＜まとめ＞ 帽子取りをする5歳児の姿から、様々な資質・能力が育まれているということが共通理解できた。また、子どもたちの主体性を支えるような教師の援助も重要であることも改めて認識し、幼保小で共有できた。



成果と課題

幼保小の教員がそれぞれに学び、有意義な研修会であった。今後は、持続可能な組織づくりや取組にしていけることが重要だと考える。

小学校と幼稚園の先生方とじっくりと話し合うことができ、保育園としてつながりをもてる有意義な研修会となった。幼稚園の先生方の取組や、育ちの見守り方を知り、いろいろな発見や気づきがあった。小学校の実態や普段見えない部分も知ることができ、就学に向けたかかわり方を考える際の参考になった。今後も保育園として、子どもたちの理解を深めていく場として参加していきたい。(保育園)

地域の小学校・保育園の先生方と顔見知りになり、教員同士の関係性ができたことは大きな成果である。また、参加者の皆さんに、「夢中になって遊ぶことで、子どもたち一人一人が、それぞれの学びをしている」ということを知っていただけたのではないかと考える。今後は、小学校の授業や保育園での保育も見せていただき、より互いの教育・保育を知り、子どもたちの理解につなげていきたい。(幼稚園)

今回の保育を参観することで、幼稚園での子どもたちの学びの過程を知ることができた。幼稚園でも小学校と同じように、保育の中に「育成を目指す資質・能力」や「ねらい」があることが分かった。学びの過程や環境に違いこそあれ、子どもたちが一所懸命学ぶ姿があることを発見できた。また、幼保小の架け橋プログラムと聞くと1年生だけのものだと思っていたが、幼稚園の先生の指導や助言、声掛けはどの学年でも生かせるものであった。様々な課題をもつ子どもたちへの関わり方は、幼保小の架け橋プログラムに取り組んでいくことで、そのヒントを見つけられる気がする。そのためにも幼保小で研究の共有や、分掌としての幼保小の架け橋プログラム部会の設置といった校内全体で取り組む枠組作りが必要であると感じた。(小学校)